



房総森輪会代表
岡部 正史さん

今回は房総の山々を舞台に、マウンテンバイクの走行コースに利用している里山エリアの整備・保全活動に取り組む「房総森輪会」代表の岡部正史さんにお話を伺いました。



里山は、宝箱。自分たちの遊び場は自分たちで守り続ける

千

千葉県で2番目に高い山・鹿野山の一角に佇む、一軒の可愛らしい丸太小屋。薪ストーブや手づくりの椅子が置かれた室内からは、木の香りとぬくもりが漂っている。この空間をつくり上げたのは、房総森輪会の代表岡部正史さん(63才)。「自分たちで間伐した木を使って、仲間と2年かけてつくった」。白い口ひげを生やし、気取らない笑顔で話すその姿は、山で活動する男のおおらかさを感じさせる。

同会は、鹿野山周辺の里山を中心に、里山所有者の理解を得ながら古道や林道、林内作業道などをつないでマウンテンバイクを楽しんでいる。その一方で、美しい森と古道を維持するために森林パトロールや、間伐をしたり、ボランティアや自伐型林業を目指す人を対象に安全面を重視した正しい作業を指導する場を設けるなど、精力的に活動している。

「千葉県に多く残る古道はマウンテンバイクコースに最適だが、放っておくと荒れていく一方だ。4年前に房総森輪会を立ち上げたのは、これ以上走れる場所をなくさないようにするため。そして、保全活動を行うことが里山を使わせて

もらっている自分たちの責任だと思っただから。最初は4人だった森輪会も、今では活動に共感して集まったメンバーが30人にも増えたよ」

—実際に活動してみたいかですか？

「本職が芸術家、コンサルタントなど多種多様な職種の人たちが集まっているから、それぞれのスキルを出し合いながら活動している。活動の中で特に大事だと実感しているのは、地域の方々とコミュニケーション。場所を借りてイベントだけやって終わりでは一方的過ぎる。俺たちはギブ&テイクの精神で、里山を使わせてもらう代わりにNPOとも協力して、植樹活動や草刈りなど求められることはできる限り応えるようにしている。信頼関係を築くまでには時間がかかるけれど、山を守るためには地域に必要とされる存在にならないとダメだからね」





丸太から角材を挽く「木取り」を指導する岡部さん



イノシシよけのネットを張るための杭打ち作業



マウンテンバイクでの森林パトロール

間伐材利用



ブリッジウォーク



岡部さんは、里山の資源は絶対無駄にしたいと強く話していた。房総森輪会では、間伐した木材を丸太小屋やハチの巣箱に利用するほか、森の危険箇所を設置するブリッジウォークなどに使用している。最近、製材機を導入したことで、これまで以上に積極的な取組ができるだろう。言われたことだけではなく、少しでも里山、そこに暮らす住民のために自分たちができることは何かを主体的に考えること。その地道で前向きな行動が、安全で美しい森を維持続ける糸口になるのかもしれない。

——里山保全に必要なことは何だと思いますか？

「プロでも一步山に入れば危険と隣り合わせ。最近、若いボランティアが増えてきたけれど、浅い知識で山に入って事故を起こせば地域からは拒絶されてしまう。そうならないように、安全も含めたさまざまな知識を備えておくことが重要だ。またマウンテンバイカーには、気持ちいいコースを走れるのは保全活動があつてこそということを理解してもらいたい。その上で走行すれば、山の環境は保たれるはず。自分たちも走行する際には木を傷つけないように最善の注意をし、轍ができたならすぐに補修するようにしている。このようなことをマウンテンバイカーに理解してもらうためには、注目度の高いスポーツメーカー

カー主催のイベントなどを通して情報発信をしていく必要があると思う」

——房総森輪会が目指すものは？

「森林は人間が生きていく上でなくてはならないもの。そのかけがえのない森林を維持し、大切さを伝えていかなければいけない。たくさんさんの宝物が散りばめられた里山を次世代を担う子供たちに残していくことが森輪会の使命だ」

「『森輪会』とは、自転車乗りが山に入るという意味」と岡部さんが会の名前の由来を教えてくれた。しかし、その輪は自転車という意味にとどまることなく、房総の山々の森林環境を守る人々の大きな輪として広がり続けるだろう。